

現代の児童書における友情の一側面 —いじめについての考察

河合麻依子

An Aspect of Friendship in Modern Children's Books

— Study on Bullying

Maiko KAWAI

1 はじめに

児童文化とは、その概念の成立過程を振り返ってみても、いまだに曖昧さの残る言葉ではあるが、広義では、「文化」という広域のなかで、子どもの生活にかかわり合える部分の総和¹⁾であるとされ、狭義では、「児童のための文化財、児童の創造する文化活動をはじめ、文化施設、文化政策、文化運動などを統一的に総称した考え方¹⁾とされている。そして児童文化財としては、図書、雑誌、玩具といった有形文化財や、演劇、音楽、舞踊といった無形文化財をはじめ、現代ではテレビや漫画、アニメといったものも、子どもたちの生活に大きな影響を与えている。この論文では、そのような文化財の中でも、「もともと中枢的な情報提供のメディア²⁾である図書を中心に、現代の子どもたちの抱える問題について考えてみたい。

毎年、夏になると、夏休みの宿題として、子どもたちに読書感想文が課せられる。テレビの台頭や受験勉強の圧迫などによって、子どもたちの読書離れが憂慮されているが、児童文化財の中枢に位置してきた長い歴史を考えてみても、また、大量に生産され、安価で消費されやすい性質を考えてみても、子どもたちの手から本が消え去ってしまうことは、まずないであろう。先ほど述べた読書感想文にしろ、教育熱心な親から、とにかく何でもよいかから本を読むことを奨励されているにしろ、現代、子どもたちが本を手にする機会は数多く存在する。子どもの読書離れ、また、マンガや雑誌などの軽いものを読むというように、読書の質が変化してきたことを考えてみると、だからこそより一層、我々は子どもたちが豊かな感性を育ていけるような質の高い良書を、意識して作り出していかねばならない。そもそも、児童文化とは、「子どもの適応性の助長に役立たせるという、いわば機能上の概念³⁾を有しており、文化財としての図書も、これに適う特性を持っているべきであろう。

この論文において筆者は、子どもたちの手にする図書を中心に、現代の子どもたちの抱えている問題について考察していくわけだが、なぜ図書を対象に選んだのか、そして子どもたちの

抱えている問題のうち、特に何を取り上げるのかについて述べてみたい。

現在、筆者は教育相談所で働きながら、さまざまな悩みを持ち、心に複雑な傷を負い、日常生活で不適応な行動を起こしている子どもたちと接している。そういった子どもたちと接するとき、その子どもが何に興味を持ち、どんなことが好きなのかを知ることは、とても重要なことである。そういった子どもたちの世界にこちらが参与し、共通の話題を見つけることから、子どもたちと関わりあっていく、いわば通路のようなものが開けてくる。子どもたちはテレビが好きである。少し前なら「たまごっち」、今なら「ポケットモンスター」が子どもたちの絶大な人気を集めており、それを知らなければ、子どもたちの話題についていくことができない。逆にいえば、それをこちらが少しでも知っていることにより、(または教えてもらうことにより)、子どもたちとスムーズに関わっていくことができるようになる。

テレビの特質は、「簡便性、同時性、速報性」⁴⁾である。テレビが子どもにとって大きな魅力を持ち、現代のメディアはテレビを抜きにしては語れないほどであるが、その弊害も非常に心配されている。ここでは詳しくは述べないが、テレビを長時間見ることの弊害としては、受動的になること、創造力や表象力を養う力に欠けること、直接的な体験でなく、間接的な経験ばかりが増えることなどがあげられる。テレビは多くの情報を素早く報道するがゆえに、子どもたちは立ち止まって、自分で考える機会を逃しがちになる。あとからあとから、新たな情報もたらされるので、テレビの話題について、じっくりと子どもたちの様子と照らし合わせて考えてみるのは、難しくなってしまう。「ポケットモンスター」が、なぜここまで子どもたちに受けているのか、また、主に青年層の間で、圧倒的な支持を受けた「エヴァンゲリオン」が、どうして彼らの共感を勝ち得たのか、そういった問題は、現代の子どもの問題を考えるときに非常に興味深いことではあるが、それらについて考察している暇もないうちに、子どもたちの興味は次の話題へと移っていつてしまう。

それに対して本は、一度読んだら、それが子どもたちの心に何かを訴えかけるかぎり、容易に忘れ去られることがない。主人公に共感し、一枚一枚ページをめくり、ひとつの文章が自分の心に入ってくるまで、子どもたちはゆっくりとした足取りで、本の世界を旅することができる。それゆえ筆者は、この論文において、図書、特に児童文学を対象として考察をすすめたい。

次に、現在子どもたちの抱えている問題のなかでも、筆者は特にいじめを取り上げて、これを論じてみたい。教育相談所の相談内容のなかで、いじめは独特な位置にある。というのも、相談件数としては決して多くはなく、むしろ少ない部類なのだが、一度いじめについての相談が持ち出されると、いじめた子どもやいじめられた子どもはもちろん、それに付随して、親、教師といった人たちとの関係もクローズアップされ、学校の経営といった大きな問題までもを孕んでくるからである。また、いじめ問題に絡んだ子どもたち双方に、大きな傷を残し、いじめられた子どもの自殺といった、悲惨な結果を招く危険性もある。当然、こちらの対応にも相応な慎重さが求められる。教育相談所の相談件数をみると、その過半数は不登校問題であり、

それについて子どもの発達に関する就学相談が多くなる。いじめ問題は、約1割程度であるが、これはどこの相談所でも同じ割合だと思われる。そして、現在の教育社会において、もっとも重要視されているのが、年々増える不登校と、このいじめ問題である。ここでは、このいじめ問題について、子どもたちの友情とそのひずみを中心に考えていきたい。

河合隼雄は『子どもの宇宙』という本のなかで、次のように述べている。「私は心理療法という仕事を通じて、多くの子どもにも大人にも会ってきたし、そのようなことについて報告を受けたり、指導をしたりすることを長年にわたって続けてきた。そして、私は実に多くの子どもたちが、その宇宙を圧殺される時に発する悲痛な叫びを聞いた。あるいは、大人の人たちの話は、彼らが子どものときにどれほどの破壊を蒙ったか、そしてその修復がいかに困難なものであるか、ということに満ちていた。彼らの発する悲痛な叫びや、救いを求める声はまったく無視されたり、かえって、「問題」だという判断のもとに大人たちからの圧迫を強めるだけに終わったりした。本書を書こうとする私の主要な動機は、そのような宇宙の存在を明らかにし、その破壊を防止したいからに他ならない⁵⁾。そして、「そのような宇宙の存在を明らかにする」方法として、児童文学を取り上げてこれを論じている。その理由は、「幸いにも児童文学の名作には、子どもたちの宇宙について素晴らしい記述がなされている⁶⁾」からである。

河合隼雄は、『ファンタジーを読む』『昔話と日本人の心』『昔話の深層』といった本のなかで、昔話や児童文学を対象に、人間の深層心理についての研究を行っている。昔話や神話が、民俗学者だけではなく、心理学者からの多面的なアプローチを受けていることは周知のことであり、ユング派のフォン・フランツや河合隼雄といった人たちが、その先駆者となっている。筆者は、そうした先達たちの手法にならい、この論文において現代の児童文学を対象に、現代の子どもたちの心の問題（特にいじめ）について論じていきたい。

II なぜ現代の作品を取り上げるのか

筆者は先に、この論文において現代の児童文学作品を取り上げ、現代の子どもが抱えている問題について論じてみたいと述べた。なぜ現代の作品を取り上げるのかというと、その理由は、端的に言って、現代の作品にこそ現代社会がもっともよく反映されていると考えるからである。そして現代の作品の中でも、特に岩瀬成子の作品を取り上げて、これを中心に論じていきたい。

作家の大江健三郎は、「文學界」のなかで次のように述べている。「村上春樹さんが読まれること、吉本ばななさんが読まれること、両方とも単なる流行ではなくて文学的な現象だと思っているわけです。…村上春樹とか吉本ばななとかいう若い小説家の本が短期間に五十万部とか百万部とか売れますね。僕はそれに意味がないはずがないと思うんです⁷⁾。その意味をどこに求めるかといえば、そうした作品が、現代の若い世代の感じていることや悩みなどを、代弁しているところにあるといえよう。つまり、現代の児童文学作品を通じることによって、現代の子どもたちの心理を垣間見ることが可能だと思われる。特にいじめといった、現代社会の

抱える大きな問題を考えてみると、時代の流れに敏感な作家の目を通して、今、われわれの心の奥に生じてきている問題を見つけることができると思われる。

「友情」といったテーマは古今東西、多くの作品によって扱われているものであり、その中枢にある性質は変わらないものであるとしても、時代によってその現れ方には微妙な変化があると思われる。武者小路実篤の『友情』、太宰治の『走れメロス』といった作品には、友情の持つ本質的な美点やその苦悩が描かれている。そこに描かれている真実は、時代を越えて我々の心に強く訴えかける力を持つ。けれども、現実にいじめがあり、いじめられる子どもといじめられる子どもがおり、そこに苦しみや悩みがあるとき、理想的な友情論を掲げてみても、根本的な解決にはならない。我々はそこに描かれている友情を、支えにすることはできる。しかし、それをそのまま現代の子どもたちの問題に、あてはめてみることは難しくなっているのである。ここに、現代の作品を取り上げる意義がある。つまり、現代の我々の心理を反映している作品を通じてこそ、現代社会の問題を浮き彫りにできると考えるのである。

ではここで、現代の作品のなかでも、なぜ岩瀬成子を取り上げるのかについて論じてみたい。先に、現代の児童文学作品を取り上げる意義について述べた。ここで問題となるのは、現代の作品のなかでも、我々が問題とする心の奥の暗い部分、いってみれば、心のなかの闇の部分を描いているような作品を取り上げる必要があるということである。

児童文学作家の上野暁は、『子どもと生きる』という本のなかで、「人間愛、友情、絆といった輝かしい理念は、“戦争”を通過した二十世紀後半では、人間が幸福を入手するための万能の一枚札ではなくなった。…“健全にして明朗な子どもの本”を軽視しているのではない。ほんとうにそうした“子どもの本”を生むためには、“不健全で不明朗”にみえる“人間の暗部への凝視”を通過しなければならないということである。最初から“暗闇”を排除した児童文学に、そうした活力ある“子どもの本”は生めないだろう⁸⁾と述べている。こうした、児童文学のなかで人間の持つ心の闇を描きだそうとした動きは、1970年代から顕著な離婚児童文学の増加に、その一面を見ることができるといえる。これは、現実での離婚率の上昇を反映して、児童文学のなかで離婚問題が扱われるようになってきたことであり、いわば児童文学のタブーが破られたことを表している。児童文学でタブーとされてきた、性の問題、両親の離婚問題、そして自殺といった問題が扱われるようになったということは、そうした問題にどう対処していったらいいのかを知る必要のある子どもの増加を意味する。そして、今の子どもたちにとって必要な物語は、子どもたち自身の持つ闇を描き出している作品なのではなかろうか。筆者は、この子どもたちの持つ闇を描き出すことのできる作家として、岩瀬成子を取り上げたい。

岩瀬成子は、作品のなかで現代の子どもたちの持つ闇を的確に表現し、傷ついた心を抱えながら日々生きていく子どもたちの様子を描いている。そして彼女の作品は、そのほとんどが、日常場面の些細な瞬間を描き出すことに成功している。特種な空間や人物を導入することなく、ごくありふれた日常生活での人間関係と、その葛藤や乖離を描いている。野上暁は、彼女の作品

について、「表面上はごくありふれた家庭のように見えながらも、それぞれに固有な悩みや問題を抱えているところが、いかにも現代の一般的な家庭の姿を彷彿させる。つまり、ここで描かれているのは現代の日常性そのものであり、そこに、この作品の普遍性がある」⁹⁾と評価している。

岩瀬成子は作品のなかで、子どもの持つエゴイズムをそのままに描き出す。また、大人に媚びているかのような「子どもらしさ」を嫌悪する子どもや、大人までもを登場させる。そうすることによって、彼女は子どもたちの闇が否定される退路を塞いでしまう。つまり、既成の「子どもらしさ」を押し付ける大人の存在があつて、はじめて子どもたちはそれにはむかい、「本当はそうじゃない」と健気にも主張することができるのだが、初めから子どもたちの媚を見抜いてしまう大人を登場させることによって、彼女の描く子どもたちは、決して否定されない闇をさらけ出すことになるのである。そうした作品のなかでこそ、現代の子どもの抱える屈折した心理を見ていくことができると思われる。

更に、岩瀬成子を取り上げるにあたって、次のことを付け加えておきたい。それは、上野瞭がいう、「『暗闇』といい、『崖つぶち』といい、それを描くということは『絶望の書』をつくるということではない」¹⁰⁾ということである。上野瞭は、「『暗闇』をくぐり『崖つぶち』に立つ子どもを描くということは、現実には、じぶんの置かれた状況を、そういうものとしてさえ認識できない子どもたちに、子どもたちの立っている位置を告げてやることである。また、そこに立ち、そこをくぐり抜けることが、より確かなじぶんとのお会いになることを示唆することでもある。別の言葉でいえば、それは、個々の子どもが、この日常的世界で遭遇し、時には傷つき、時には混乱するだろう問題を、孤立した一人の人間ではなく、多くの子どもに関わる問題として描く努力をし、人間である以上、さまざまな形でそれに立ち向かわねばならぬことを伝えることでもある」¹⁰⁾とも述べている。

岩瀬成子の作品は、「このままではどうなってしまうのだろう」という不安をリアルに描き出し、そしてその状態がそのまま進んでいってしまうところに、「それでも児童文学か」という批判の声もあがるわけだが、その、子どもたちの闇を描き、子どもたちを混沌のうちに置き去りにしてしまいかねない潔さこそが、現代の子どもたちの無意識での共感を呼び得るのだ、と筆者は考えている。

以上のことから、現代の作品として岩瀬成子の作品を取り上げるわけだが、彼女の作品のなかで友情がどう描かれ、いかに現代の子どもたちの屈折した心理を描いているかは、いくつかの作品を通じてこれから論じていきたい。

III 作品分析

1 『子どもたちの森』(1993)

まずはじめに、『子どもたちの森』という作品を取り上げ、ここで描かれている子どもたち

の、友だちに対する屈折した感情をみてみよう。

『子どもたちの森』は1993年に出版された、岩瀬成子の12番目の作品である。ここでは、きくという小さな女の子が主人公であり、となりに住んでいたみえちゃんという友だちが、引越しをすることによって生じた感情を、美しい絵と一緒に描いている。作品としては短く、絵本と児童書の間くらい長さであろう。

みえちゃんが「きくちゃん、さよなら」(p2)と行って去っていくとき、きくは、「だんだん小さくなっていくみえちゃんのせなかを見ていると、なきそうになった」(p2)と感じている。そしてみえちゃんのいなくなったあと、今では誰もいなくなったみえちゃんの家へ行き、みえちゃんと遊んだ日々を思い出す。けれども思い出すことといえば、二つ年上のみえちゃんにいじめられたことばかりであった。

「みえちゃんはこわかった」(p16)と、きくは思い出す。みえちゃんは、「いうことをきかないと、“うちの物置にとじこめる”」(p16)と言ったり、「桜の木にのぼって、“とびおりろ”」(p16)と言ったりした。そして、きくが怖がって桜の木から飛び降りれないでいると、「だめ。とばなきゃ、もうあそんでやらない」(p16)と言うのだった。そんなみえちゃんのことを、きくは「みえちゃんはいじわるだった」(p17)と思い、「いじめっ子のみえちゃんがいなくなって、これからは、もういやなことはしなくていいんだ」(p20)と感じるのである。

ここでは、きくはいつも一緒に遊びながら、きくに命令ばかりして、意地悪だったみえちゃんのことを思いだす。そして、みえちゃんがいなくなってせいせいしたと感じている。けれども同時に、きくは、当たり前のようにとなりにいたみえちゃんがいなくなったことに対して、言葉では言い表せない寂しさも感じている。この、友だちに対するアンビバレンツな心理は、人間なら誰しもが持っているものであり、特に小さい子どもの場合、いじめられつつも一緒に遊ぶような関係が多いように思われる。

友情とは、真に対等な二人の人間の間ではじめて成り立つものであると思われるが、まだ自我がはっきりと形成されていない子どもたちにとっては、対等というよりも、どちらかが優位にたつて成り立っていく面もあると思われる。このような心理が、更に強調されたのが、次にあげる『アトリエの馬』であるが、こうした、誰でもがなんとなく感じていたことを、はっきりと言葉にして表現した作品は、これまで少なかったように思われる。

2 『アトリエの馬』(1981)

『アトリエの馬』は1981年に出版された、岩瀬成子の4番目の作品である。ここでは小学校4年生になる、まりこという女の子が主人公で、彼女が涼子という同じ年の女の子と出会い、そして別れていく物語である。この作品では、さきに『子どもたちの森』で述べた、友だち同士の屈折した関係が、より一層明確に表されている。

まりこの家の隣には、アトリエと呼んでいる小さな家があり、今では貸家となっているのだ

が、ここに、涼子とその父親が引っ越してくることから物語は始まる。まりこは涼子が引っ越してくるようになったとき、どんな女の子が来るのかとあれこれ想像する。まりこは、「年下だったらいいな」(p21)と思う。なぜなら、まりこは年上の人と遊ぶのは苦手であり、それというのも、「命令されてもさからえないし、だいいちなにも知らないで、いつもまちがいだらけのことばかりしている赤ちゃんみたいなあつかわれ方をするのがいやだった」(p21)からである。また、「同じ年だったら、当然学年もいっしょになり、学校でみんなの中でも、その子と話したり遊んだりしなくてはならない」(p21)と思い、それもまりこにとっては苦痛に感じることであった。だからこそ、まりこは年下の女の子を期待するのであり、その子は「色白でおとなしく、まりこがなにか言えば、かならずそのとおりにしたがう、かわいらしい子」(p21)とまで想像するのであった。

けれども涼子は、まりこの期待にことごとく反する女の子であった。見た目は小さく、まりこはてっきり期待通りの年下かと思ったのだが、涼子の態度ははじめからそっけなく、まりこは失望を感じる。涼子の態度は、「新しく知り合いになろうとしている者同士に必要なルールあいての気持ちを思いやることーをまったく無視しているように見えた」(p29)のである。

涼子はどこまでもふてぶてしく、一言で言って「嫌な子ども」であった。まりこの母親に聞かれ、自分の母親は山で遭難して死んだのだと答えておきながら、翌朝まりこに、「あたしのおママね、死んじゃいないのよ。家出しちゃったの。あたしとパパをおいて、どっかの男の人といっしょに消えちゃったのよ」(p41)と告白する。なぜそんなことを言ったのかと尋ねると、「だって、あんたのお母さんたら、あたしのこと、かわいそうな子どもだと思いたがってるんだもの。ちょっとサービスしてあげたの」(p41)と答える。学校でも、自己紹介のとき先生から、「さ、平井さんも、なにかひとことあいさつしてちょうだい」(p42)と言われ、涼子が答えたことは、「とくに言うことはありません。…あたし、友だちなんて、たいしてあてにしていから」(p44)というものだった。

そんな涼子に、まりこは完全にねじふせられてしまう。涼子は朝、まりこが迎えにいったとき、「…もしいっしょに登校したいんなら早めに来てね。あたし、ぐずぐずしたり、のろのろしたりするのすきじゃないから」(p38)といい、「あーあ、あたし手がかれちゃった。きのうひっこしのかたづけをひとりでやったじゃない。けっこうつかれるものなのよね。それに、あんたはランドセルだからいいけど、あたしは、ほれ、これだもの」(p40)といって手さげ袋をまりこに見せ、いつのまにかまりこにそれを持たせてしまう。まりこと涼子はいつも一緒に登下校するようになり、まりこは涼子の鞆持ちまでさせられる。まりこは、「涼子ちゃんの前では犬と同じだった。主人にさからうといたい目にあわされることを知っている、みじめな犬だ。涼子ちゃんは、すべての権力をにぎっている飼い主だった」(p56)とある。

けれども、涼子のやり方は少し変わっていた。学校の門の中と外とでは、まるでまりこに対する態度が違うのだ。「家ではどんなにひどい命令にもまりこを服従させる涼子ちゃんなのに、

学校ではまるで別人になってしまうのだ。…話し方までがらりとかわる。…さんざん悪態をつきながら歩いていたのが、袋を受け取るや、急に“ね、まりこちゃん”と、やさしい声で話しはじめる」(p56)のである。この涼子の態度の変化には、次のような理由があった。それは、「まりこは、はじめ、涼子ちゃんのこのかわりようにめんくらったが、しだいにいることに気づきはじめた。それは、ふたりに対するみんなの視線が特別のものになりつつある、ということだ。そしておそらく涼子ちゃんのねらいも、この特別な立場に自分をおくことにあるということだ。クラスのみんなどは、転校してきたばかりのふうがわりな女の子がまりこにだけ取り入って、いろんなふうがわりな話をして聞かせている、そういうふうにふたりを見ているにちがいはなかった」(p59)というものであった。そしてまりこは、実情はどうであれ、このような「特別な」関係を築いている自分を、愉快に思うのだった。なぜなら、「これまでだれも、まりこことそんな秘密めいた友だちになってくれはしなかった」(p59)からである。

この、「秘密」ということが、子どもたちにとって非常に大切なものであることは、多くの児童文学が描いていることであり、河合隼雄の指摘するところでもある。河合隼雄は『子どもの宇宙』のなかで、カニグズバーグの『クローディアの秘密』を取り上げ、次のように述べている。「秘密をもつことによって、クローディアは今までとちがった人になれる。秘密の存在がアイデンティティを支えてくれるのである」¹¹⁾そして、「秘密をもつということは、取りも直さず“これは私だけが知っている”ということなので、それは“私”という存在の独自性を証明することになる。秘密ということが、アイデンティティの確立に深くかかわってくるのもこのためである。少女のクローディアが“秘密”の獲得に強い熱意を示したのもこのためである」¹²⁾と述べている。

まりこは涼子に意地悪をされつつも、涼子との秘密めいた関係に魅力も感じる。それは、この秘密ということが、まりこを特別な人間に感じさせるからであり、その他大勢の一人ではない、たった一人の個としての自分を感じることができからである。この、他人との秘密ということは、閉鎖性をもつ。この閉鎖性は、自分たちを他から区別すると同時に、そこに入ることも、出ることも許さない力を持つ。

例えば、カニグズバーグの『Tバック戦争』では、その友だちとの輪が主人公を圧迫し、本当に自分らしくあることができなくなってしまう。これはアメリカが舞台となっているが、主人公の女友だちは、ある子の髪形が決まらなかった日には、他のみんなも髪を水に濡らし、一緒に髪形が決まらない苦痛を共にするという、変わった約束を取り決めようと言い出す。主人公は、そんなばかげた約束は決してしたくないと思うのだが、面と向かって拒否することはできない。一度グループで受け入れられたことは、たとえそれがどんなに理不尽なことであっても、主人公はそれに異議を唱えることはできなくなってしまう。この物語では、みんなと行動や思考までも一緒にしていないと不安になってしまう主人公が、休暇中に出会った一人の伯母を通して、他人にまどわされない「本当の自分」を手に入れる物語である。

いじめとは、大人の社会であっても子どもの社会であっても、未熟な心性から生じるものであると思われるが、そうした集団の中では、人は本当の自分であることができなくなってしまう。たとえ秘密を持ったとしても、それを保持するだけの心の強さも同時に持たなければ、いたずらにその閉鎖性の中に自分を閉じ込めてしまうことになる。そしてその中では、人は他とは違う言動がとりにくくなってしまふ。

『アトリエの馬』のなかで、涼子のふてぶてしい態度は、涼子が非常に傷ついた子どもであり、その脆い心をなんとか守っていた防衛手段であったことがわかる。そのことに気づく前に、まりこは知らず知らずのうちに、涼子を深く傷つけてしまう。まりこは涼子の父親のことを、まりこの母親や涼子の前で、徹底的に侮辱してしまうのだ。まりこは自分の母親と涼子の父親が仲良くするのを好まず、不満を抱いていた。その気持ちは、涼子も同じだと思っていた。そしてあるとき、涼子の父親に対する不満を一気に発散させてしまうのだが、それは涼子にとってみれば、自分の一番弱い部分を、いきなりわしづかみにされたようなものだった。「まりこは、はっとして涼子ちゃんを見た。涼子ちゃんは八畳のふすまのかげに、両ひざをかかえてうずくまり、顔をひざにおしあてていた。涼子ちゃんのその姿は、逆にまりこを打ちのめした。涼子ちゃんがまりこの前でそんな姿になるなんて、想像したこともなかった。おこるはずのないことだった。…わたしたちの目的だと信じてしたことが、実は涼子ちゃんを母さんたちの前ではずかしめることになったのだ」(p116)

それ以来、まりこと涼子は気まずい思いを抱いたまま、すれ違いの生活を送るようになる。まりこはある日、川原で次のような気持ちを体験する。「ふいに、わけのわからない感情がわきおこってきた。それはいかりでもにくしみでも、また悲しみでもなかった。まりこがはじめて体験する気持ちだった。…自分がだれからもはなれていることを、はっきり感じ取りはじめていた。それは悲しいことではなかった。ただ、これからはずっとこうなんだと思うことは、やはり少しさみしいことだった」(p121) このあと、まりこは久しぶりに涼子の家に行き、言葉をかやすのであるが、涼子はその後すぐに、父親と一緒にアトリエを去っていった。自分が涼子を傷つけてしまったこと、そのことは、自分が涼子にいじめられるより、ずっとまりこを切なくさせた。涼子の、傷つくまいとしていつも警戒しているような心を見たまりこは、相手も自分と同じようにとても弱い、ただの女の子だったことを知る。

この、「同じ」であるということ、けれども二人は、やっぱり違う人間であるということの自覚は、子どもたちに何をもたらすのであろうか。このことについて、最後に、『「うそじゃないよ」と谷川くんはいった』を取り上げて考察してみたい。

3 『「うそじゃないよ」と谷川くんはいった』(1991)

『「うそじゃないよ」と谷川くんはいった』は、岩瀬成子の10作目にあたり、1991年に出版されている。これは、るいという小学校5年生の女の子と、谷川くんという転校生が出会う

物語で、るいは教室では一言も口をきかない、非常におとなしい女の子として描かれている。そのるいに、転校してきた谷川くんは、「ねえ、きみ、しゃべらないの？ずっと？だれとも？…どうして。ぼくとは話せよ。気がむいたときでいいからさ」(p21)と話しかけ、それ以来、るいにとって谷川くんは、特別な存在となる。

谷川くんは、両親の仕事の都合で世界中を旅してきている。そして今、谷川くんの両親はブラジルに行っており、谷川くんはおばあちゃんと暮らしているということだった。谷川くんはクラスで、「太平洋のサンタクルス島」や「インド洋の波」や「スリランカの動物園」のことを話し、クラスの人気者になっていった。そんな谷川くんを見て、るいは心の中でそっと、谷川くんと話しかける自分を想像するのだった。「火星のことだけどね」と、星の話からはじめるのがいいかもしれない。そしたら谷川くんはどんな顔をするだろう」(p25)と、るいは考えてみるが、「でもるいがしゃべりたいのは谷川くんだけで、ほかの人たちとは、どんなことを話せばいいのかわからなかった。話したいことが何もないような気がした」(p27)のである。

いっぽう谷川くんは、ある日るいを誘って一緒に下校し、そのときにるいにお金を貸してくれと頼む。るいは頷いてお金を貸し、それ以来、谷川くんはちょくちょくるいにお金を借りることになる。あるとき谷川くんは、るいを空き家に連れていき、そこでるいに、「…ぼくね、ここで空を見てたりすると、人の姿が見えてくることがあるんだ。白い肩が見えて、背中が見えて、それから首のあたりや後ろ頭も見えてくる。でも、それがだれかはわからないんだ。背はそんなに高くないような気がするけど、顔はなかなか見えない。顔を見ようとするすると消えてしまうんだ」(p41)と話す。谷川くんと二人でいるとき、るいは自分でも不思議なほどによくしゃべることができるのだが、いざ自分から教室で話しかけようとする、どうしても言葉が出て来ないのだった。るいは、「自分がしゃべりたいときにしゃべれないことに、はじめてあせりを感じはじめていた」(p48)

珍しい話をたくさん知っている谷川くんは、クラスでも人気者になっていったのだが、いつしかそんな谷川くんの態度を、クラスの男の子たちは疑わしいものと感じはじめる。男の子たちは谷川くんに向かって、「話がどうも派手なんですよ」(p51)と言ったり、「外国のことをオレらが知らないと思って、勝手なことばかりいつてるんじゃないのか。話だけなんて信じられないぜ」(p51)と言う。実際、谷川くんの母親は他の男の人と一緒に家を出てしまっており、谷川くんは古いアパートに、妹と二人で暮らしているのだった。そんな谷川くんの様子を見て、るいは「もし谷川くんの話が何もかもうそだったとすると、谷川くんがいるということさえうそになってしまう。そんなことがあっていいわけがない。見たことのほうがうそだということだってあるんじゃないのか」(p65)と感じる。

結局、谷川くんはクラスの男の子たちからいじめられるようになり、そのうち妹と施設に入ることとなり、そっとクラスから姿を消していくことになる。最後に、谷川くんはるいに借りていたお金を返すために、いつかの空き家でるいに会う。そのとき谷川くんは、るいにこんな

ことを言う。「いつだったか、ときどき頭の中に見える白い肩のことを話したことがあるだろ。あれがだれなのか、わかったんだよ。…ぼくなんだよ。右の肩をちょっと上げているところ、どっかで見たと思ったら、ぼくだったんだ、笑っちゃうだろ。…ほんというとね、教室でいちばん前の席にすわっているきみがね、どうしてだかあの肩に似ているような気がしていたんだ」(p117) そして更に、「ぼくは人類の一人だと、なぜだか急に思ったんだ。急に頭の中にその言葉がぱつとうかんで、そしたらさけびだしたいような気持ちになった。…どうしてだかわかんないんだけどね。そんなこと思った。そしたら、やっぱり妹のところに帰ろうって思ったんだ。変だろ」(p118)とるいに話す。るいはその言葉を聞いて、「おとなになって、子どものころの気持ちや約束を、たとえぜんぶわすれてしまっても、谷川くんのことだけはおぼえていたい」(p118)と感じる。

るいは学校ではほとんど口をきかない女の子であり、それは「小学校に入って以来ずっと、五年間つづいていた」(p8) そしてるいは、いつも「ここじゃない、どこか遠く、空のむこうへ。いまはこうして翼を休めて、子どものふりをしてすわっているけれど、いつかはどこかへ帰っていかなきゃならない」(p9)と感じていた。そんなるいの世界に、はじめて谷川くんという他者の存在が意識されはじめる。なぜなら、谷川くんとるいは、心の中に「ここではない、どこか」の世界を持っている、いわば同類のような人間だったからだ。

谷川くんの現実、非常に辛いものだった。ほとんど両親に捨てられた形になっており、幼い妹と二人で生きている。一方るいは、ごく普通に両親と暮らしており、何一つ不自由なく暮らしていたが、やはりどこか、息苦しさを感じていた。るいの両親については、次のような描写がある。「この家を建てたとき、両親はへやのドアをぜんぶとっぱらおうとしていた。どこにいてもいと話ができるようにと考えてのことだった。でもその計画はるいが強く反対したために実行されなかった。そのかわり両親はいつもるいを見ていた。見ていないふりをしながら、るいが特別な問題をかかえた子どもにならないかどうか、じっと観察していた。るいにとってそれはうっとうしいことだった」(p79)

谷川くんとるいの二人は、内面に自分独自の世界を築いていた。その二人が出会ったとき、そこには二人にしかわからないファンタジーが広がっていった。谷川くんが、いつも頭に浮かぶ白い肩のことを、なぜだかるいだと思ったのも、そうした内面的な繋がりを感じていたためであろう。るいはそのことをはっきりと、「谷川くんは、ここじゃないどこかへ、いつもつながっていた。その谷川くんにつながっていれば、るいもいつか、ここじゃないどこかへいけるような気がしていたのだ」(p112)と感じている。

けれども、この二人に対する級友たちの態度はどうであったか。るいに対して、ある者は「かわいそうな子」として扱い、ある者はいじわるをし、そしてもっとも多いのが、るいのことを気にもとめない人たちだった。そのことをるいは、ちゃんとわかっていたが、どうすることもできないまま、また、どうする気も起きないまま、黙って過ごしていた。谷川くんに対し

ては、はじめは珍しい話を知っている子としてみんなは興味を持ったが、そのうちに谷川くんの話を嘘だと思い、とうとういじめの対象としてしまった。谷川くんの話すことは、確かに嘘ではあったが、それを谷川くんの心の中にある本当の世界のことだと信じることができたのは、るいだけだった。そんな谷川くんに会って、はじめてるいは、自分が話したいときに話せないことにあせりを感じ、谷川くんともっと親しくなりたいと感じるのだった。

るいと谷川くんは、お互いの中に共通の世界を見だし、友情を育てていった。谷川くんは最後には、その思いを「人類の一人」という意識にまで高めていく。同じ思いを抱きつつ、二人は個々の人間である、そういう意識を、谷川くんといは持つことができたのではなかろうか。人はそれぞれ、違うのが当然である。その違いを知り、それを乗り越えていくところに、人間同士の繋がりは生まれると思われる。その違いを認めることができず、あくまでも他人の世界を肯定できないとき、そこには人間同士のひずみ生まれ、いじめにもつながっていくといえよう。

以上、岩瀬成子の3つの作品を通して、現代の子どもたちの友情とそのひずみについて考察してきた。これらから、現代の子どもたちの友だち関係といじめ問題について、実際の子どもの様子も交えて考察していきたい。

IV いじめの背後にあるもの

岩瀬成子の作品について考察してきた結果、現代の子どもたちの持つ友情の、ある一面が浮き彫りにされてきたと思う。それは、次のようなことである。

まず第一に、子どもが友だちに対して抱く、アンビバレンツな感情があげられよう。このアンビバレンツな感情とは、いじめられつつも一緒に遊ぶというものであり、この背後には、「支配—服従」といった関係があると思われる。子どもたちは普通、毎日のように親や教師から、いうことを聞くよう、いい子であるよう言われ続けている。その一方で、子どもたちは自我を形成し、自立心を育てていく。子どもであるが故に、大人からはいつも「子ども扱い」をされている中で、自分よりも年下であったり、自分の言うことを素直に聞くような相手がいたら、このときとばかりに自分の方が優位に立ちたいと思うのは当然であろう。『子どもたちの森』のみえちゃんは、年上だったからきくよりも優位に立っていた。『アトリエの馬』の涼子は、その大人びた態度で、おとなしいまりこを服従させていた。ではなぜ、きくやまりこは、その関係から逃れようとししないのだろうか。ここが、友だちに対するアンビバレンツな感情であり、子どもに独特なものでもあろう。

私たちは、いつも自分が優位に立ちたがり、いばってばかりいる人と友だちになりたいとは思わない。思わないだけでなく、実際に友だち付き合いをしないですむ方法を考える。それはひとつには、私たちがすでにある程度の自我を形成しており、他人の存在によってそれが揺らぐことがまずないからである。私たちは、自ら自分にふさわしい友人を選ぶことができる。も

うひとつには、私たちを取り巻く世界が子どものときに比べて、より多彩になっているからであり、ひとつの集団の中だけにではなく、他のいくつかの集団の中に、友情を求めることができるからである。しかし、子どもたちの世界は、主に家庭と学校に限られてしまう。子どもにとって、一人の友だちはそのまま一つの世界である。同時に、一緒に遊ぶことに魅力を感じるからこそ友だちになったのであり、そうした基盤があつてこそ、支配し、服従する関係が成り立つとも思われる。はじめから支配―服従を求めていたのではなく、子どもの持つ友情が、そうした関係を作りやすいといえるのであろう。

次に、秘密を共有することによって、友だちとの親密さが増すと同時に、それが閉鎖性を持つことがあげられよう。『アトリエの馬』で涼子は、学校ではわざと、まりこにだけ親しく振る舞うことで、二人があたかも「秘密めいた」関係だと他の人に思わせる。そうすることによって、自分のいうことを聞き取りこが、自分から離れていかないようにする。それは同時に、涼子が実はとても傷つくことに臆病であり、狭い世界を自分の周りに築くことで、自分を守ろうとしていたともいえるであろう。

この閉鎖性は、その輪の中にいる者同士の結び付きを強め、更にはその他の人間を排除しようとする性質を持つ。そうすることによって、自分たちだけが特別であるという感情を味わうことができる。そういった集団の中で、自分たちだけが知っているという気持ちを味わうことは、大なり小なりどこの集団でも同じことであらう。ただ問題なのは、そういったことでしか自分の独自性を感じられないことであり、そういったことで根拠のない優越感を感じることであろう。これは勿論、子どもの世界だけに限ったことではなく、自分に確固としたものを何も持たないにもかかわらず、自分の属する集団が他者よりも優れていると思ひ、それが権力を振るい始めると、果ては戦争ということにも繋がっていくのではなからうか。そして身近なところでは、いじめといった行動に現れるのであろう。

最後に取り上げたいのは、この閉鎖性ということに関連して、これとは対照的な、個を意識した上での繋がりを持つという関係である。このことが描かれていたのは、『「うそじゃないよ」と谷川くんはいった』である。

閉鎖性に囚われるとき、人は自分という個性を殺されてしまう。そこでは他人と同じ考えを持ち、同じ行動をしなければならぬような力が働く。けれども谷川くんとるいは、同じ内的世界を共有していたのであり、そこでは個性を殺すどころか、個性をますます活かす力が働いていた。るいが興味を持ったのは、谷川くんという個人である。その谷川くんは「ここじゃないどこかへ、いつもつながっていた」人であり、そうした世界をるいが共有したからこそ、二人の関係は創造的で独自のものとなつていった。5年ぶりに教室で、るいの口を開かせたのは、谷川くんの「うそじゃない」という心の叫びであり、その言葉にるいは、「ほんとうです。ほんとう」と、答えないわけにはいかなかったのである。こうした関係を体験したからこそ、谷川くんは自分のことを、「人類の一人」といえるまでに高めることができたのであろう。そ

うした意識を持つとき、人は他者を排除しなくても成り立つ自己を持つことができる。

以上の点から、いじめ問題を考えたとき、その背後には集団に寄り掛かることでしか、自分の独自性を保てない人間が、他者を排除することによって自分の足場を固めようとしている様子が考えられよう。

河合隼雄は『子どもと悪』の中で、「人間はどうも異質なものを排除したい傾向をもっている。何か異質性を感じると、それを排除しようとするところにいじめが発生する」¹³⁾と述べている。『「うそじゃないよ」と谷川くんはいった』の中で、クラスの男の子たちは、谷川くんの持つ世界に共感できず、異質なものとして排除しようとした。しかし、るいはいじめの対象とはなっていなかった。それはなぜかと言えば、るいは極力目立たないよう、集団の中で自分の存在を殺すようにしていたからであり、他の人たちの目になるいの存在がクローズアップされない限り、るいの存在は彼らにとって、自分たちの存在を脅かすような脅威とはならなかったからである。けれども谷川くんは、転校生という立場でもあり、とかく彼らの目に止まる存在だった。すぐ目につくところに、異質な存在がいるということは、自分たちの集団にとってその存在意義を問い直されることであり、集団の中でしか自分というものの独自性を感じられない人たちにとっては、それははっきりと排除すべき脅威となっていたのである。

更に、いじめにはもう一つの面があると思われる。これまでは児童文学作品を通して、いじめというものは、集団の持つ閉鎖性が自分たちの独自性を保つために、異質なものを排除しようとする結果生じてきたものであることがわかった。ここで筆者は、いじめの起こる要因として、異質なものを排除することにつけ加えて、誰かをスケープゴードにすることによって、実際以上に自分を強くみせようとする心理が働いている点に注目したい。

筆者が出会った事例は、小学校6年生の女の子で、いじめによる不登校であった。ここでは詳しくは述べないが、彼女がいじめられた理由は、彼女が特別に個性的だったからではなく、おとなしかったがゆえに、いわゆる「弱い者いじめ」のスケープゴードにされたからであった。彼女がいじめられる弱い存在にされたがために、いじめっ子たちは強そうに振る舞うことができた。誰かを弱い立場に追い込むことで、自分たちが優位に立ち、優越感に浸ることができる。河合隼雄は、「いじめが陰湿化し、過酷になっていく要因のひとつとして、子どもの心のなかに鬱積している感情が非常に大きい、ということがある。この点については、大人は大いに考え直す必要がある。子どもたちに対して、無用の圧力を加えていないだろうか。これは欧米先進国に比して、日本においては特に大きい問題である」¹⁴⁾と述べている。確かに、誰かを弱者に貶めて、そうすることによって自分を強くみせようとする心理の背後には、河合隼雄のいうような、非常に鬱積した感情が潜んでいると思われる。そして、そうした感情を子どもに与えてしまう点において、大人は自分の言動をよくよく注意して見る必要がありそうである。この、子どもを追い詰める大人の行動として、河合隼雄は次のように述べている。「子どもへの圧力の増大の原因として、競争社会ということあげている人がいるが、これは単純すぎる。競争社会

といえば、欧米の方が日本よりはるかに厳しいと言えるだろう。小学校でも落第や飛び級のあるところも多い。欧米では子どもの個性、自主性を早くから重んじているので、子どものペースで勉強するように考えており、小学校のときの成績に、日本人ほどのこだわりをもっていない。これに対して、われわれ日本人は個性ということがわかりにくいので、自分の子どもが“何番”であるかという序列にやたらにこだわる。…親が自分の子ども自身の成長の過程に対する信頼をもっていない。常に他との比較によって自分の子どもを見ている」¹⁴⁾ この、「親が自分の子ども自身の成長の過程に対する信頼をもっていない」ということに関して、筆者は親が、自分の子どもに「秘密」を持たせることができないことをあげたい。

先に筆者は、子どものアイデンティティに秘密が深く関わるものであることを述べた。けれども教育相談所で働いていると、子どもの行動を全て把握していないと気がすまず、子どもが親に秘密を持っているなど、とんでもないと思っている親からの相談を受けることがある。その場合、子どもというのは大抵、高校生のことである。高校生ぐらにならなければ、親を心配させるほどの行動力を持ってないこともあるのだろうが、親は一樣に、子どもの日記や手紙を黙って読み、そして何かしら心配になって教育相談所に電話をかけてくるのである。自分の行動が常に監視されており、常に親の管理下に置かれるようにコントロールされているのは、ずいぶん窮屈なことであり、息苦しさを覚えるのが自然であろう。そうした圧迫が小さい頃からずっと続いていたら、それを発散させるために自分よりも弱い者を見つけ、その人をいじめることによって自分が支配する立場に立とうとするのも、無理のないことかもしれない。もちろん、だからといっていじめが許されるわけではない。河合隼雄のいうように、「… “いじめにもいいところがある” と主張したいのではなく、“いじめを許さない” という態度を大人が厳しく持つのはいいとして、それによって自分が子どもたちの心を掌握している、だから問題はない、などという単純な考え方に陥って欲しくない」¹⁵⁾ であり、「子どもの世界は、それなりの広がりをもっており、大人が簡単に理解したり、支配したりできるものではない。…いじめを黙認したり、奨励したりせよなどと主張しているのではない。しかし、“いじめ絶対反対” という態度が、子どもの行動を規制したり、支配したりする方に偏って硬直していくと、子どもたちの固有の世界を壊すことになる危険性を十分に自覚する必要がある、と言いたいのである。子どもは子どもなりに、互いにぶつかり合いながら、相互に切磋琢磨している。その世界を尊重する気持をしっかりと持ちつつ、限度をこえぬ守りとしての役割を大人が果たすように考えるべきではなかろうか」¹⁵⁾ ということ、我々は考えていくべきであろう。

おわりに

最後に、いじめを乗り越えていく力とは何かを考察し、この論文を終えたいと思う。

筆者は、いじめに屈しない力として、一人でいられる強さをあげたい。これは一見単純なことであるが、言うのは易しく、実行するのは非常に難しい。なぜなら、一人でいられることと

は、同時に他者とも繋がっているというパラドックスを含んでいるからである。

一人にいるということは、アイデンティティが確立されたとか、自立していると言ってもいいと思う。アイデンティティということに関して、河合隼雄は『クローディアの秘密』という作品を取り上げ、「このことは、取りも直さず、アイデンティティというものが、あくまで自分だけに固有のものでありつつ、他の人々とのつながりのなかに存在しなければならぬというパラドックスをもつことと相応するものである」¹⁶⁾と述べている。そして自立ということに関しては、母子分離の事例をあげ、「何の関係もないのは孤立であって自立ではない。自立することは、母親と無関係になることではなく、母親と新しい関係をつくりことである」¹⁷⁾と述べている。そして更に、「人間はどれほど恵まれた環境にあっても、疎外感や孤独感を体験しなくてはならぬときがあるようだ。それは、人間存在に必然的にそなわっているものと言ってもいいだろう。特に子どもにとって、その自我が以前よりは意識され、自立へと向うとき、それは一応は他と異なる存在として意識されねばならぬので、周囲の人がどんなにいい人であっても、言い知れぬ疎外感や孤独感に襲われるのである」¹⁸⁾とも述べている。

この言いようのない孤独感は、『アトリエの馬』の中で、涼子を傷つけてしまったまりこが次のように表現している。「わたし、どうしちゃったんだろう。いても立ってもいられないほどの不安が、まりこをおし流そうとしていた。…母さんもおじさんも、まりこからは遠くはなれた所にて、べつべつの心を持って生きている、ただのよその人のように思えた。…まりこは、自分がだれからもはなれていることを、はっきり感じ取りはじめていた。それは悲しいことではなかった。ただ、これからはずっとこうなんだと思うことは、やはり少しさみしいことだった」(p123) 一人でいられることは、この孤独感を引き受けることである。だから、いじめられる子どもに対して、無思慮に一人でいられる強さを身につけろといったのでは、こちらはその大変さを、全く理解していないといってよい。特に臨床の現場で子どもたちに会うときには、私たちは子どもが自分でそうした力を身につけるまで、辛抱強く支えながら待つことが大切となる。こうした、子どもたちを支える力があって初めて、子どもは一人での寂しさと強さを手に入れるのであり、誰からも離れて、一人ぼっちになることを言っているのではない。

『「うそじゃないよ」と谷川くんはいった』の中で谷川くんが手に入れたものは、自分が「人類の一人」なのだという意識であった。これは、他者と繋がりつつ、自分は個性を持った一人の人間であるという意識を表していると思われる。『子どもと大人』という対談集の中で、河合隼雄と見田宗介は次のように言っている。「“向こうっ気が強いと意外といじめられないということはありますね” “気合ですわ。気合があればね” … “(『風の又三郎』は) もう一つ次元の違う世界とつながっているという感じがありますね。不思議な世界とね。人間でいえば、そういうつながりをもっている人間は強いんじゃないでしょうか。別にみんなとつながってなくても、ちょっと別の世界につながっている。それは存在価値ともいえると思います” “み

んなどのつながりとは別の次元で、何か大きい世界とつながっている人間は一人でも強いし、安定している。それは自然でもいいし、外の世界のようなものでもいい”¹⁹⁾

こうした、どこかと繋がっているような人間は、それらに支えられながら、一人でいることができる。そうした世界を持っていることは、その人の内面が非常に豊かであるということである。その世界とは、「別の次元」でもいいし、「自然」でも「外の世界」でもいい。もちろん、家庭であっても良いと思う。これは具体的に親や兄弟の存在をいつているのではない。そうではなく、家庭の中で、家族のそれぞれが生きている世界のことである。そうした大きな世界を感じさせる家庭は、子どもにとって何にもかえがたいものであろう。子どもたちが生きていくために、「気合」を入れることができるのも、そうした家族に守られてこそではなかろうか。

山田詠美の『風葬の教室』に登場する家族は、素晴らしい魅力に溢れている。クラスメートにいじめられ、自殺を考えていた主人公の杏は、母と姉の会話を聞いて自殺を思いとどまる。なぜなら、「私が死ぬ決心をしているちょうど同じ時に、母と姉は、私のためにシュークリームを焼く相談をしているのです。愛情というのは、私とは別の所で動いているのです。…私は自らの手で自分を消してしまおうと決意した時に、責任という足枷の存在に気づいてしまったのです。私は、ただの一個の人間ではなかったのです。目に見えない足枷によって身動きのとれない幸福な奴隷だったのです」²⁰⁾ということに気づいたからである。この作品に登場する家族は、のんびりした父親や、娘と自然にセックスの話のできる母親、そして素敵な不良娘である姉だが、こうした人たちがそれぞれに自分の人生を生きながら、一見、無頓着に見える愛情をふんだんに杏に注いでいる。杏はそうした家族の幸せと、自分の存在とが決して無関係ではないと気づいたために、死ぬことよりも生きていくことを選ぶことができたのだろう。

この論文では、3つの児童文学作品を対象にいじめについて考察してきた。いじめとは複雑で、根の深い問題であり、当然ここで全てを網羅できたわけではない。ここでは、いじめの持つ、ほんの一部分について考察したに過ぎない。ここではいじめと友情を中心に考察してきたが、いじめっ子やいじめられっ子の心理の背後には、家族の問題も潜んでいると思われる。こうした現代の家庭の問題も交えて考察してみることによって、いじめの持つ、また別の面が見えてくるものと思われる。

謝辞

研究を行うにあたって、この論文を書く機会を与えて下さり、終始ご指導を下さいました、本学、新倉朗子教授に心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

使用文献

- 岩瀬成子 『子どもたちの森』 あかね書房 1993
岩瀬成子 『アトリエの馬』 学校図書 1981
岩瀬成子 『「うそじゃないよ」と谷川くんはいった』 PHP 1991

引用文献

- 1) 原昌編著 『新訂児童文学概論』 p.13 健帛社 1986
- 2) 前掲書 p.50
- 3) 前掲書 p.11
- 4) 前掲書 p.68
- 5) 河合隼雄 『子どもの宇宙』 p.6 岩波新書 1987
- 6) 前掲書 p.7
- 7) 「文學界」 8月号 1998
- 8) 河合隼雄編 『子どもと生きる』 p.72 創元社 1985
- 9) 「飛ぶ教室」No44「もうちょっとだけ子どもでいよう」書評 野上暁 1992
- 10) 河合隼雄編 『子どもと生きる』 p.74 創元社 1985
- 11) 河合隼雄 『子どもの宇宙』 p.28 岩波新書 1987
- 12) 前掲書 p.48
- 13) 河合隼雄 『子どもと悪』 p.171 岩波書店 1997
- 14) 前掲書 p.180
- 15) 前掲書 p.89
- 16) 河合隼雄 『子どもの宇宙』 p.52 岩波新書 1987
- 17) 前掲書 p.81
- 18) 前掲書 p.89
- 19) 見田宗介・河合隼雄・谷川俊太郎 『子どもと大人』 p.16 岩波書店 1997
- 20) 山田詠美 『風葬の教室』 p.123 河出文庫 1991